

式 辞

本日、学位記を授与された二十六名の皆様、情報科学研究科博士後期課程の修了、誠におめでとうございます。新型コロナウイルスの感染は世界各国に広まり、厳しい時代が続いてきました。まだ苦しんでいる方も多くいらっしやいます。一方でようやく灯りがみえてまいりました。しかし、みなさまが博士後期課程に在籍された期間はまさしくコロナ禍の真只中という状況でした。そのような苦難にも関わらず学位記を受領された皆様の、本日に

至るまでの御努力に心から敬意を表し、お祝い申し上げます。

さて、本日、皆様が学位を受領されたということは、新しい旅立ちをする準備ができたことを意味します。この旅は、新たな挑戦、新たな成長、そして新たな成功をもたらすものになります。どのような困難があっても、皆様は自分自身を信じ続け、自分自身の夢を追い続けてください。皆様それぞれの希望を実現するために、私たちは全力で応援します。というような少し浮ついたこ

とを申し上げましたが、これはChatGPTに「学位授与式で、聞く人が感銘を受けるような言葉を教えて」と聞いて返ってきた答えです。出来の良さに感心してさっそく使ってみましたが、皆様の感想はいかがでしょうか？ 幻滅を感じた人はもちろん多くいるでしょうし、なかには私より気の利いたことを言っていると感じた人もいるでしょう。あるいは、ChatGPTらしく至極当たり前な無難なことを言っていると感じた人もいるでしょう。本日はこのことについて考えてみたいと思います。

ChatGPTが今騒がれているのはご存知のとおりです。新しいビジネス、サービス等新たな情報革命の予感を感じさせます。一方で、ChatGPTに講義のレポートを書かせて合格したとか、嘘が多く混じったことをもっともらしく言っているという話もあります。これらが今、随分議論の的になっていますが、ほんとうに問題なのはそれだけではない、もっと深刻な問題がある

ると私は思っています。私たちは専門家ですから、対象システムの特徴を正確に理解し、目的に怠じてリスクをとりながら活用すればよいと思います。しかし、専門家でない人も含めてそのような社会的合意がなされないままに使われだしていることは大きな問題だと思っています。Google検索もそうですが、豊富な知識はどう考えてもAIに分があります。それを恥じる必要はもちろんありません。人が勝るのは、優れた着想力であり、創造力であり、そして新しい問題を設定し解決する力であるからです。単に与えられた問題を解決するプログラムを作るだけなら、ChatGPTもすぐにできてしまうでしょう。仕様書さえ与えればAIがプログラムを作るノーコードも、すでに現実になりつつあります。

プログラミングもスキルであると考えれば、それも不思議なことではありません。例えば、英語も専門の研究者を除けば、スキ

ルであって学問ではありません。その結果、論文を読むために翻訳ツールを使うこと、さらに論文を書くために利用することも必ずしも悪いことではないと思います。研究するために基礎知識が必要ということはもちろんそのとおりです。また、先人の学びを追体験することももちろんだいじです。しかし、そこに創造はないということでは、従来技術を対象とした改良型の研究は、ChatGPTならずすぐにできてしまうでしょう。そのような研究は

本来的な意味からも研究ではないということであり、そこに私たちは老機感を覚えなければなりません。このことが、私がまず申し上げたいことです。AIには決してできない研究や技術開発を目指すことなくしてはならないということです。

もう一点申し上げたいこと、それはChatGPTのような技術がもたらす社会的脅威の議論は決して新しいものではないということでは、原子力爆弾を産み出した科学者の深い反省から、

科学と社会の関わりについて議論が始まりました。車もそうです。自動車は人の身体的能力を超える便利な機械として発明されました。しかし、交通事故により、今でも多くの方が亡くなっています。そのため、車利用に関する社会的受容は長い時間をかけて形成されてきました。ここで申し上げます社会的受容とは、市民との対話による技術利用に関する合意形成のプロセスです。車の安全性は残念ながらいまだ十分ではありませんが、そのような

社会的合意の形成がだいじであるということです。GPTについて言えば、Googleも技術自体は当然持っていたにも関わらず、その社会的影響に鑑み、その公開を控えてきたと言われています。残念ながら、Googleも自社の生き残りをかけ、ChatGPTの後を遡ってBardを公開しました。今後どのようなか私にもまだわかりませんが、社会的合意に程遠い現状において、ビジネスを優先させたという現実があります。

GPTは非常に魅力的な技術であることは事実です。しかし、そのことをもつともよく知る研究者や技術者が社会的責任を果たしていると言えるでしょうか？ それは利用者が決めること、行政が決めること、あるいは政治が決めること、という主張もあります。しかし、情報技術の社会的影響の大きさを考えた時、今やそれだけではすみません。私たち研究者や技術者は社会的影響、特に負の側面まで考えて研究開発に取り組まないといけない

ということなのです。そのために行政や市民との対話や合意形成がだいじですし、私たちは技術がもたらす利便性だけでなく脅威も正しく理解し伝えられることがだいじだと思います。

情報科学技術がもたらす社会的影響はますます大きくなっていきます。その結果、私たち情報科学の研究者や技術者が新しい技術を生み出す際に求められる社会的責任は今、大きく変わりつつあります。これから、大学で研究を続ける方、企業において研究や開発をされる方、さまざまだと思えますが、皆様も学位をとられた今、ぜひ科学者や技術者が持つ社会的責任について考えていただきたいと思います。

令和五年三月二十三日

大阪大学大学院情報科学研究科長

村田正幸